

C 「アア　そおか。」

◆年長組　男女児

A 「先生は、どうして、ごはんたべないの。」

B 「びんばうだから？」

C 「どうして給食はパンなの。」

B 「栄養あるから？」

D 「ね、先生はモダンなんだよ。パンはアメリカ式なんだろ。」

(四)　さいごに

自分で経験したことをそのままに書いてみましたが、反省してみると、子どもたちにとっては、それが負担であり、また適切な指導

日ごろ努力していること

リトミックによるリズム指導

清水　久　仁　子

私たちの生活、またその周囲にはあらゆるところにリズムが存在する。取りまく数多くの環境、四季おりおりの移り変わり、今日暮れて

でなかった点も多々あり申訳なく思うのですが、私個人にとって非常によい勉強になっていることはたしかです。

今年も、園の努力点の一つに、「子どもの話しことばをのばすための指導の研究」が、かかげられています。そして、継続的に研究をして、みんなの勉強のために、学期に一回ずつの組単位発表研究会をおこなう予定が組まれています。

今年は、二年保育年長組を受持ちました。子どもたちの話し合いの中にとけ込み、今一歩進歩した指導法を、実際の子どもたちとの生活の中から生み出し、楽しい生活の中にも何か、はつきりとした目標をもって努力していくつもりでおります。

(久松幼稚園)

また明日を迎える喜び。一挙手一動すべての行動にいたるまで。そしてわれわれはこの自然の中に存在するリズムに調和出来た時こそ、

はじめてそこに人生の喜びを感じることが出来るのではないだろうか。

幼ない子どもたちはブランコに揺れている。縄踏びをしている。あるいは一心にクレヨンを動かして絵を描いている。それら一つ一つにリズムが芽生えている。持って生まれたリズム感にはそれぞれ大きな個人差があるが、その芽を大切に引き出し、正しく導びき伸ばして行くことにより、子どもたちの生活（遊び）が、よりいっそう生き生きとした楽しいものになるのではないだろうか。

× × × × ×

ここに二年間の幼稚園生活も終わろうとする卒業期の子どもたちが、本当に楽しんでリズムにのり、皆がそこに溶け込んで遊べる喜びを持つようになるまでの経過をざっと記してみることにする。

○クラスの状態（年長き組）

●クラス編成

男児十七名 女児二十一名 計三十八名

二年保育児 三十一名 一年保育児 七名

●幼児年令

四月～六月 十二名 七月～九月 九名

十月～十二月 八名 一月～三月 九名

●知能

田中ビネーによるIQ 級平均一二七

WISCによるIQ 級平均一二〇

●家庭環境（保護者の職業）

会社員十九名 教師 五名 医師 四名 商業 四名

銀行員四名 公務員一名 その他一名

●兄弟関係

一人子 七名 末子 十四名 長子 十四名

兄弟の中間三名

●保育室の広さ

保育室 十二坪 遊戲室 三十五坪 運動場二百六十坪

子どもたちの家庭は、大体中産階級以上の堅実なインテリ層で、両親は非常に教育に関心を持っている。子どもたちの中には各種の才能教育を受けているものが多く、家庭においてもラジオ、テレビ、レコードなどを通して良い音楽を聞く機会に恵まれた、リズムには親しみ易い環境に置かれている子どもが多い。しかし一方では、兄弟が少なく、入園前の生活が大勢のおとなの中で愛玩され、保護過剰の状態で過ごして来た子どもが多く、入園当時はどこかひ弱な、そしてはつらつとした子どもらしさにおいて物足りなさを感ぜさせられる子どもが少なくない。

○週に一度のリトミック

毎週月曜日の午前中、年少（二級）、年長（二級）に分れて、それぞれ三十分から四十分間（その時どきの子どもたちの状態により時間

は適当に縮められあるいは伸ばされる)おこなわれる。

この日の指導者としては、特にこの道に経験豊かな先生をお二人(子どもの誘導者とその伴奏者)外からお招きしている。この十分ばかりの時間は、私たちにとっては直接指導から離れて客観的に子どもたち全体を、そして全体の中の一人ひとりを眺められる尊い機会ともなっているのである。

●目 標

×視覚、聴覚を通してのリズムに興味をもたせ、皆が喜んで参加できるように。

×身体活動を通してリズムに親しませ、リズムミカルに動くことに喜びを感じさせながら、自己の表現能力、創造力を養う。

×リズム表現を通して運動能力を養う。

×リズムによる表現活動を通して、自然物や、社会的生活(行事など)への関心を深める。

●実際の指導

年少も最初、入園当時は大きな生活の変化にただ夢中で時を過ごしている子どもたち。緊張している故に身体も自由に動かせず、声もじゅうぶんに出せない子どもたち。中には最初からありあまった勢力の発散場を幼稚園にみつけれ、園内をわが物顔に走り廻ったり、無軌道にあれば廻る子どもたちも見られる頃には、まず自由に身体を伸ばし、動かし、大きな声を出させて心身共にしこりをほぐし、

じゅうぶんに安心感を持つて皆が参加できるようにする。毎週リトミックの最後には、ピアノによる生の音楽を聞くことになつていく。美しい動きを見て、美しい音旋律を聞いて、何かそこに美しい物が感じられるようになればよい。そこには必ず子どもたちの心の中に豊かな情緒を植えていくに違いない。

汽車になり、トンネルをくぐり、鉄橋を渡り……と最初は誘導されるままに何となく、ぞろぞろついていく子どもたちも、その内リズムに興味を持ちはじめ、喜んで参加するようになると、リズムにおける表現活動にも積極性が現われ、身近な環境の中から子どもたちに親しまれている動物、乗物、日常の遊びなどを自由に表現できるようにになる。特に保育室に飼育されていたお玉じゃくし、亀、金魚、かたつむり、かいこ、二十日ねずみなどの表現の中には、のびのびとした子どもらしいものがいくつも見られ、私たちを喜ばせた。こうして年少組の一年間というものは、じゅうぶんにリズムに親しみ、聞くこと、歌うこと、模倣すること、自由に表現する事などを通して、正しいリズム(音の速度、強弱、拍子、高低)を理解させ、身につけることに費やされた。

年長組になると、その自覚とともに、皆があらゆる面で急に成長したように感じられる。こうして幼稚園生活という軌道にのりきった子どもたちの中へ、一年保育児七名を迎えて、またそこにはお互いに助け合う新鮮な雰囲気が生まれた。新入児たちも周囲に引っぱら

れながら、それとは思えぬほどの成長振りを見せ、一学期の内にはすっかり皆の中に溶け込み、その差異はほとんど見られなくなった。

この頃のリズム指導では、今までにじゅうぶん親しめたリズムに加えて、豊かな表現力、創造力、あらゆる行動が更によりリズムミカルにできるようにということに重点が置かれる。

今までにおこなわれた具体的な実例を二、三挙げてみると、

○ピアノの曲を聞いた後その曲がどんな感じがしたかを話し合う。

最初のうちはどんな曲を聞いても「蝶々が遊んでいるよう」だとか、「お人形が踊っているよう」などしか出てこなかったのが、変化に富んだリズム、曲などをだんだん聞き分けられるようになり、

「水の上に舟が揺れているよう」「雲がふわふわ浮んでいるよう」

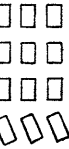
「小人が遊んでいたら悪魔が来て食べちゃった」など、想像豊かな答がたくさん出てくるようになった。それに伴って表現力も伸び、指導者の注文に応じて物の表現ができたり、一つの曲の中で各々自由な表現が出来るようになってきた。

○運動感覚を通してのリズムでは、大きな床上積木を一定の間隔を持って並べ、その間をつまずかないように歩いたりスキップして自由に廻る。最初その数が二つばかりだったのが次第に多くなり、その間隔や並べかたも複雑になり、並べられた

①



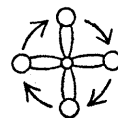
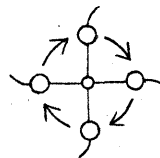
②



ップで廻ることなども出来るようになる。

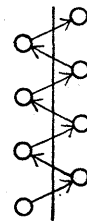
○輪投げの一つの輪を中心に四人がグループとなり、皆が右手であるいは皆が左手でその片手で輪を持ってスキップ

輪を持ち、一定方向にリズムに合わせて走ったり、スキップやギャロップする。

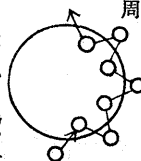


○縄踏び、汽車ごっこなどの縄を伸ばし、交互に踏びながら進む。

この時は特にはっきりしたリズムが必要とされる。



直線



円周

これらはすべて日常の遊びを中心として取り出されている為、最初の内は自意識過剰で、人前では思うような行動の出来なかった子どもたちも、興味と喜びのうちに何のこだわりもなく、スムーズにリズムの中に溶け込んでいった。

これまで述べてきたリトミックにおけるリズム指導は意識的なものであり、とかく強制的なリズム指導になりやすいものであるが、あくまでも子どもたちの興味と関心とを考え、日常の遊びに即して結びつけられたリズム（ある時は楽隊に、ある時はリズム劇にまで展開されることもある）の中に楽しませながら、伸びる芽を育てることに努力しなければならない。（大和郷幼稚園）